

財団だより

# 多摩川



コミスジ (タテハチョウ科)  
 開張40~55mm。黒地に白の線が横に3本。食草ハギなどマメ科の植物。

1991.12 第52号



土砂崩れによる道路の崩壊地。(檜原村都民の森下 '91.11撮)

## ■多摩川現風景■

### (8) 洪水のつめ跡

多摩地域は今年の夏たび重なる台風に見舞われた。その被害が最も顕著にあらわれたのは奥多摩の山々であろう。集中豪雨による山崩れの傷跡は今も各所に残されている。写真の風景は、南秋川源流部の土砂崩れである。奥多摩有料道路がスッポリ消失している。この上流部には平成2年5月にオープンした「都民の森」があり、その園内も土石流により被害を受け一部閉鎖されている。

多摩川源流地域は、これまでも大雨のたびに山崩れがみられたが、これ程の被害は珍しい。

しかし、多摩川上・中流が玉砂利の一大産地であったとする歴史的経過から考えると、岩石の崩落は当たり前で奥多摩の山々は常に砂利の供給をしていたことになる。ただ、その日常的な山崩れが、人間の造った施設に被害を及ぼしたために災害と

呼ばれる。これを人災とするのか天災とするのか、それぞれの立場で意見が分れる。

### ●関連する財団の助成研究 <学術研究>

- ①多摩川における応用地理学研究〔流域開発に伴う多摩川の水環境の史的変遷〕  
 市川 新 1977 No.3
- ②多摩川上流域における水源林の理想的あり方についての調査研究〔主として、森林調査の立場から〕  
 西沢 正久 1978 No.12
- ③多摩川流域容量について〔多摩川流域に期待できる自然のめぐみとその開発限界〕  
 佐橋 義仁 1977 No.6
- ④多摩川上流いわゆる奥多摩地域の環境保全のための資源調査および応用地理学的研究  
 徳久 球雄 1982 No.62
- ⑤多摩川源流域の森林立地に関する地形・地質学的研究  
 小泉 武栄 1988 No.114

## 多摩川散歩

### ● 浅川合流点から高幡橋

浅川勉強会 山本由美子

多摩川中流に注ぐ一級河川浅川は、八王子の西端、檜原村、山梨の県境に位置する陣馬山を源とし、標高320mの中野橋際に起点がある。30.15km(内日野市域7km)を流れ下り流域は2市のみ。ほぼ中央部を西から東に貫いている。日野の古老にアザガワと呼ばれ、普段の水量はさしたる事もないが、増水時には手に負えない暴れ川と伺った。

梅林で名高い京王線百草駅で下車、八王子方面に向い右へ。10分程で小高いデルタの先に立つ。途中幅員12~13m、深い護岸の底を流れる程久保川にかかる玉川橋から下を覗くと両側に自然石張りの道と思ったが降りる階段がない。川べりの鉄柵に凝った模様、道はタイル張り、御影石の上部を平に磨いた縁の鋭いものが大小5ヶ程。その間に板を渡し青年が一人座って地図を広げている。冬冷たく夏熱い、足を滑らしたら痛いぞ済まない。植生も都心の公園から切りとったよう。誰が誰の為になのか、お金の掛り方が目立つだけに腹立たしい。聞けば「憩いの水辺」事業の一環とか……。

このデルタは地図のように、浅川、程久保川間のものだが、浅川が瀬になって多摩川に合流する様子がよく見える地点なのだ。二つの川が出逢う光景は魂を揺る何かがある。オギ、ツルヨシの穂が銀色に波打つ秋、生命に満ちたこの広い空間に身を置くと、明るく静かなものが心の内に満ちてくる。堤外地のみすばらしいニセアカシヤも、サギ達にとってたいへん安全な罫なのだ。小鳥を狙いハヤブサやチョウゲンボウも飛来する。

10月に入るとカモを始め、冬鳥がゾクゾクと渡って来る。3~4月北へ帰る頃まで、ここは鳥達のメッカになる。

浅川最下流の新井橋まで1.3km右岸を歩く。土手下に広く田が残る奥に、高幡~万願寺の渡し、更に落川へ抜ける旧道落川通りがあり、それに面し

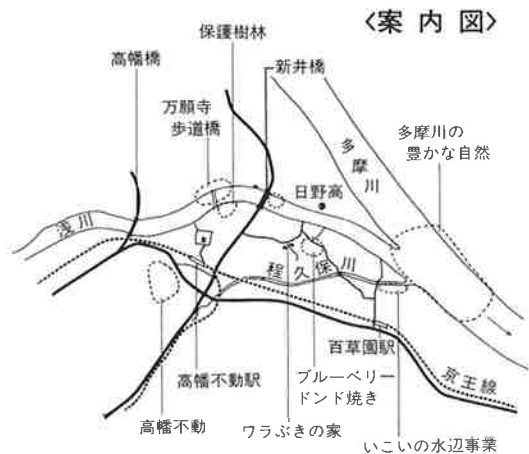
た農園で夏期ブルーベリーを摘ませてくれる。梨作り農家も健在。正月15日塞の神(ドンド焼き)の行事は子供達の正月小屋から始まり、竹と藁で組まれた小屋に古いお札、正月飾り等を差しこみ、中で雑煮でまあ一杯と云う事になる。災いを防ぐ村の辻神を祭り、最後に火を放ち、おき火で小枝に刺した団子を焼いて食べると無病息災なのだ。

新井橋を渡る。土方歳三の生家と、墓のある石田寺が近い。橋際の水辺には休日釣竿が並ぶ。鯉、へら鮒等放流魚が主だ。ウグイ、ニゴイ、ナマズ、コトブシと云った浅川本来の主を戻したい。

上流に万願寺歩道橋。川下りのゴール地点だ。右手に小高く多摩平の段丘。対岸に多摩丘陵縁の高幡山、彼方に富士が丹沢、甲州、奥多摩、高尾陣馬、秩父の峰を連ね雄大なパノラマを展開する。あの山塊の一角から出て長い時をかけ穿ち、沖積低地を大きく動きながら、浅川は今ここに閉じ籠められた。中島、向島、石田、大木島、無番地、地名には昔を窺わせるものが多い。だが、この暴れ川が日野に豊富な湧水、200kmに及ぶ用水を可能にし、美田を養い、人々の暮らしに深く関わっているのだ。

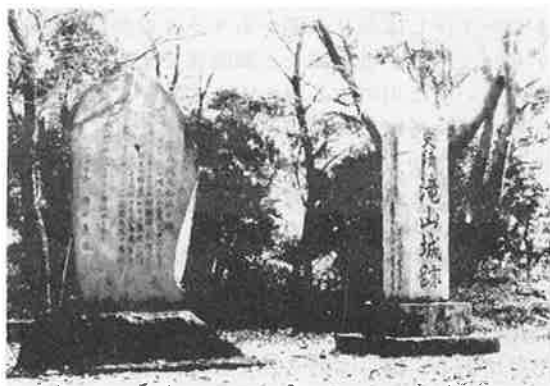
右岸の名刹高幡不動境内には丘陵の水がめぐる。毎月28日が例祭。第3土曜に市が立つ。

日野市は周囲25km余、多様でたぐい稀な水の街なのだ。日本初の「水路清流課」が設けられ「水の里めぐり30景」などの水辺ガイドがある。



## 私と多摩川

### ● 拝島の渡し場付近



史蹟 滝山城跡

八王子市郷土資料館専門員 鈴木利信

東京環状国道16号線が昭島市域で多摩川を渡る拝島橋は昭和30年の架橋である。それ以前は、下流の日野橋までの間に橋はなく、平の渡し、築地の渡しとこれから述べる「拝島の渡し」が今の拝島橋の辺りにあった。

戦国時代、この付近には高月城や滝山城など大石氏や後北条氏にかかわる山城があった。永祿12(1569)年に滝山城を攻めた甲斐の武田信玄は、多摩川の渡河作戦のため拝島に陣を敷いたという。

やがて、江戸に幕府が開かれると甲州街道や青梅街道など、多摩地方では東西の道が重要になってくる。そうした中で、承応元(1652)年から八王子千人同心が日光東照宮の火消し警備のために、八王子から拝島、松山を経て日光へ通うようになった。それで、この南北の道は宿駅が設けられて、日光街道と呼ばれるようになった。さらに、同3年には玉川上水が完成したため、本流の水量が減って多摩川を渡ることは容易になった。

拝島の渡しは江戸時代初期からあったといわれる。『新編武蔵風土記稿』の拝島の項には「渡津、渡舟、日光街道筋多摩川にあり、百姓渡しにて南の方、作目村より当村に便りす、冬より春の間は土橋を架して往来の便をなせるなり」とある。こ

の文中にある作目村は渡し場の南側(右岸)にあった多摩川沿いの村(川付村)である。文祿・慶長(1592—1614年)のころ、多摩川の大洪水によって、山中にある鎮守の白山神社を残して人家・田畑とも押し流されて、滝山城跡の山際までが荒涼たる河川原野になった。荒野と化した土地は17万5000坪に達したと記録に残されている。助かった村民は多摩川を渡って拝島側へ移住したのである(現昭島市田中町)。狛江市の堤防欠壊もまだ記憶に新しいが、何の保障もない時代の大洪水の惨状は想像に絶するものであろう。発掘調査などが可能ならば歴史の教訓を生かせると思う。

寛政12(1800)年に、八王子千人同心の子弟等100名が、蝦夷地(北海道)開拓警備のため3月21日千人頭原半左衛門に率いられて八王子を出発した。同心の家族や同僚は拝島の渡しの川原まで送り、晴天のもとで送別の宴が開かれた「多摩川の側に餞飲する者数百人」と『風土記稿』はそのありさまを述べている。

明治以降の拝島の渡しは、春から秋まで水量の多い間は舟渡りで、乗客が来れば渡すというものであった。渇水期には仮橋が架けられていた。昭和10年ごろで渡し賃は1人2銭、自転車・荷車5銭、馬力10銭であった。

拝島の大師さまとして知られる「元三大師」の例祭は正月2日で参詣者で賑わうが、戦前には八王子辺りからも約2里の山道を歩いて行く人の列が続いた。臨時バスも運転されたが、道幅が4mほどなので滝山丘陵にバスの交換所が設けられて電話連絡で運行していた。この日は1年中で拝島の渡しが一番繁昌する日であった。渡しは昭和15年ころまで存続していた。その後、本格的架橋を目指して同19年に現在地に鉄筋コンクリートの橋脚だけが完成した。そして、拝島側の住民から「勤勞奉仕に出るから」と請願も出されたが、敗色深まる空襲下でついに実現をみるにいたらなかったのである。



よみがえ

## 甦れ！多摩川

コイ釣り。(関戸橋下)

## 多摩川紀行

## 山道省三

## ①関戸橋～多摩水道橋(狛江市東和泉) 約11.2km

多摩川カヌー下りもいよいよ中流部の最も人影の多い区域に差しかかった。今回は洪水の後でもあったから釣り人も少なかったが、今までの経験からすると何かトラブルの起きる予感がしてならなかった。11月17日(日)午前11時40分関戸橋下からスタート。気温と水温の測定は準備中から釣りが話しかけてきてうっかり忘れてしまった。

スタートして間もなく、何をするのか様子を聞きにきていた中年の釣り人が、突然、陸の上から怒鳴り出した。流れの両岸にびっしりと並んでいるコイの仕掛けの釣り竿は予め知っていたので、糸に触れない様に川岸近くを静かに下っている時だった。「貴様何をやっているんだ。常識を知らんのか。もう何時間も当たらないのに、益々釣れなくなるではないか!」。水面からは、投げ込まれている糸は光って見えるので触れる事はないし、仕掛けははるか流れの中程に投入してあるのだから何の支障もないはずである。しかも通る時には必ず「通ります」と声を掛けてもいる。「常識がない」と言われて、久しぶりに逆上してしまった。「それはどういう意味だ」と岸に近づけていったら、釣りをしているのにカヌーで通るとは非常識だとさらに言う。みっともないとは思ったが、謝ることはないと負けずに怒鳴っていると「どこの者だ」と聞かから、思わず「建設省…」といったら急にトーンが落ちた。職業詐称としかられるかも知れないが、職員とは言っていない。しかし、これは効果きめんであった。「早く通ってください」と急に丁寧語に

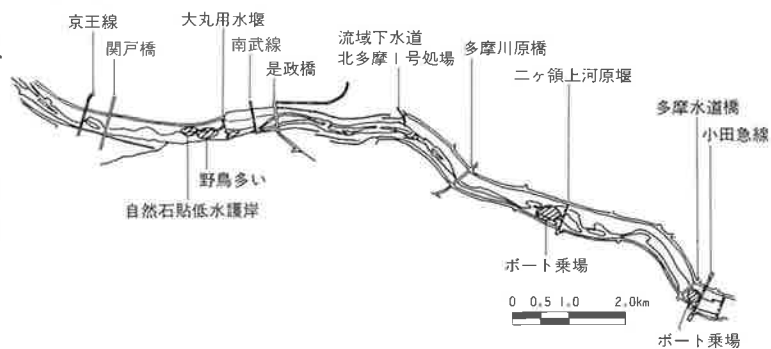
変わって拍子抜けしてしまった。対岸からも怒鳴り声があるので振りむくと、対岸はもっとすさまじく、3mおきぐらいに100本以上の竿が林立している。多摩川は両岸から投げられた糸でXマークに光って、異様な光景を呈していた。流れがゆるやかで少しばかりの淵がありそうな所は全て竿が立っている。否、淵など無関係ですらある。川幅の広い所は川の中心部を下るのだが、わずか30cm程の浅い所にすら仕掛けが投げ込まれている。岸からは分からないのか、それとも川の地形が読めないのか、魚と釣り師のかけ引きなど緊張感はまだ感じられない。釣り人は、何本もの針といっしょに丸めた人の拳ほどのエサをただ遠くに投げるだけ。釣れたコイは川の中に礫でつくった浅い生けすにほうりこんで帰りに礫をどかしていくだけである。従って釣られたコイは浅い生けすで腹を擦り、釣り針で口を傷だらけにしている。まるで細長い釣り堀で、完全装備のイライラした釣り人に、ペット化され丸々太ったコイが傷だらけになりながらひきずり回されている異様な構図が浮かんでくる。

二ヶ領用水上河原堰下の分流した流れは、何人かに竿を上げてくれないかと頼んだが、無言で無視されてしまい。とうとう川の中をカヌーを引っぱって本流までう回しなければならなかった。

冬枯れの多摩川の風景など、とてもそんな余裕などなく、11km程に4時間半もかかってしまった。多摩川水道橋に着いた時にはもう日没で、あたりには暗闇がせまっていた。ひどく疲れてしまい川原に座り込んでしまった。

多摩川には季節を問わず多くの人々が訪れ、思いの時の時を過ごしている。しかし、その利用法もひとつの目的だけに特化されると今回のようにギスギスした空間になってしまう。多摩川はどうあるべきかの議論とともに多摩川はどう利用されるべきかの議論は同じ重みを持つことを強く感じた。

## 案内図



## 財団からのお知らせ

### 〈研究助成報告書完成〉

助成集報（第18巻）並びに多摩川環境調査助成集（第12巻）が完成しました。

内容は下記のとおりです。

### 助成集報第18巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
● 多摩川流域における水循環に伴う土壌侵食の研究	鈴木 啓 助	東京都立大学理学部助手
● 大東京圏における多摩川の価値の評価の研究	大 石 堪 山	東京都立大学理学部 助教授
● 降雨時における中小都市河川からの汚濁負荷流出量の把握と多摩川水系の汚濁に関する研究	岡 田 光 正	東京農工大学工学部 助教授
● 多摩川およびその支流における直鎖アルキルベンゼンスルホン酸塩(LAS)の流下に伴う除去過程	高 田 秀 重	東京農工大学農学部助手
● 多摩川水系における洗剤由来の酸素の分布	田 畑 真佐子	東京理科大学薬学部助手
● 多摩川上・中流域の水質保全対策の検討を容易にするためのパソコンを用いるマンーマシン型水質システムモデルの開発	鈴 木 基 之	東京大学生産技術研究所 教授
● 多摩川における底生付着微生物群集の解析とその環境改変作用の評価	渡 辺 泰 徳	東京都立大学理学部 助教授
● 多摩川およびその流域のいくつかの試水における塩素化フェノールの分解と、その分解菌に関する生態学的研究	瀬 戸 昌 之	東京農工大学農学部 助教授
● 野川流域の自噴井、湧水、地下水中のラドンの分布と環境放射能への寄与に関する研究	堀 内 公 子	東京都立大学理学部助手

### 多摩川環境調査助成集第12巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
● 浅川周辺住民による手づくりの河川浄化—木炭による浄化の試み—	加 藤 文 江	浅川地区環境を守る婦人の会
● 多摩川上流水源山村地域における冷水資源と山葵栽培—土地利用の地理学的研究—	上 野 福 男	駒沢大学名誉教授
● 高校化学における多摩川の水質の教材化とその指導法の研究—陸水の地球化学から環境教育へ—	小 島 和 雄	都立砂川高校教頭

# 《“多摩川およびその流域の環境浄化に” 関する調査・試験研究”募集》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってき  
ました。既に259件の研究に対して助成金を交付し、198  
件の研究成果を得ることが出来ました。

平成4年度も引き続き首都圏における「多摩川および  
その流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境  
改善計画のための研究」をひろく募集いたします。

対象者は、研究を専門とする方に限らず、一般のどな  
たでも研究に意欲のある方でしたら、ふるって応募して  
下さい。

## 研究について

多摩川は山梨県笠取山を水源とし、東京都と神奈川県  
の県境を経て、東京湾に至る138kmの一級河川です。そ  
の流域面積は、1,240km<sup>2</sup>といわれています。

多摩川を浄化するためには、その流域の環境をも改善  
しなければ目的は達成できません。

従って、河川や地下水の水質や水量、それらとかわり  
のある生物相や生物群集の研究、多摩川およびその流  
域の地質、地形などの自然科学的研究だけでなく、土地  
利用、地域計画、都市化に関連する諸問題、川の歴史や  
文化、環境観や環境教育など広く自然科学と社会科学に  
またがった研究も大いに歓迎いたします。また、治水、利  
水、親水、流域改善計画に関するあらゆる領域にわたる  
広汎な研究を期待しております。

欧米に例をみない速さで、高齢化がすすみ人口の過密  
な首都圏の環境の中で、水域と陸域の統合体である多摩  
川の河川からその影響圏の環境を見直してみることは、  
極めて大切なことと考えます。

**公募締切日 平成4年1月16日**

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03)3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

## 年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助 成 件 数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	119	118	237	372,713
	B類	59	41	100	41,011
昭和60年度	計	178	159	337	413,724
昭和61年度	A類	6	20	26	45,851
	B類	9	9	18	11,585
	計	15	29	44	57,436
昭和62年度	A類	9	15	24	42,704
	B類	6	12	18	9,932
	計	15	27	42	52,636
昭和63年度	A類	10	13	23	24,878
	B類	4	10	14	11,167
	計	14	23	37	36,045
平成元年度	A類	8	12	20	38,652
	B類	3	5	8	9,334
	計	11	17	28	47,986
平成2年度	A類	10	11	21	37,614
	B類	6	5	11	10,666
	計	16	16	32	48,280
平成3年度 (10月末日現在)	A類	6	15	21	30,809
	B類	4	6	10	5,944
	計	10	21	31	36,753
合 計	A類	168	204	372	593,221
	B類	91	88	179	99,639
	計	259	292	551	692,860

※ A類は学術研究、B類は一般研究

- 発行日 平成3年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

